



東九州支部報



迦智山山頂にて (5月3日)

韓国山岳会蔚山支部との 交流登山参加報告

加藤英彦

日本山岳会東九州支部メンバー二名で、去る五月二日より六日まで韓国山岳会蔚山支部との交流登山会で、韓国の山に初めて登ってきた。案内された山は、蔚山広域市の郊外に連なる海拔一〇〇m〜一二〇〇mの稜線が連なる、嶺南アルプスと呼ばれる山城の、その最高峰を中心とした山々である。

五月二日

午前六時大分駅発特急にて博多へ。博多駅から福岡港へはタクシー四台にて移動。チェックを終了し、国内を出てビートルに乗船。一〇時一五分、定刻に福岡港発。最近の鯨との衝突の事故のためシートベルト着用、船はやや減速で、定刻より一五分遅れで釜山港へ入港。入国手続きをするとロビーにて蔚山支部の方々の出迎えをうける。すぐに銀行にて両替へ。当面の隊の金四〇万円を両替、三、〇二四万ウォンとなり、かなりの量でパスポートをみせるとチェックされる。

出迎えを受けた荷物専用の車に全員の荷物を、そしてメンバー二名は三人づつ四台に分乗して釜山の街をあとにする。車は左ハンドル、右側通行、釜山のラッシュの町を抜け高速道路を走り蔚山へ入る。

ここからすぐに本日の宿泊地、雲門山自然休養林の林間の宿舎に向かうために雲門嶺峠を越え、さらに緑深い谷間を下っていく。そして谷間の道から左へ少し入るとゲートがある。まだ新しい施設だ。ホテルありロッジ風の建物あり。我々の宿舎は石積み崖に建つ、三

《 も く じ 》

韓国山岳会蔚山支部との	
交流登山参加報告	1
嶺南アルプス概念図	3
コースタイム	4
参加者名簿	5
ひとくち感想	5
アルバム	8
おわりに	9

つのロッジ風建物の右二棟で、左の一棟は蔚山支部員の泊まる所である。一棟に六人づつ別れて入る。荷物ときしばしの休憩だ。

午後六時に迎えがきた。蔚山の中心街まで四〇分かけて走り、本日の交流会の会場へ。市の中心街のレストランの二Fに席は用意されておき、我々を歓迎する立派な垂れ幕が飾られている。その下にこちらが持参した「祝第三回日韓友好交流登山」と書いた紙製の横幕を張る。

東九州支部二名、蔚山支部三名でなごやかな雰囲気の中、交流会はそれぞれの代表者の挨拶に始まり、記念品交換のセレモニーとそれぞれの記念品の説明をする。通訳はプロではないようなので、訳すのにややおぼろげな言葉でしか伝えてないようであるが、皆熱心に聞いている。お互いの全員の自己紹介が終わるまで一時間三〇分はかかった。

いかげん空腹状態にて、ようやく乾杯となる。酌み交わすお酒はビールではなく、韓国の焼酎である。宴も進むと日韓の山仲間があちこちで、各自車座になって互いに酒をつぎあうようになる、やがて時間も下がりお開き。宴会の後、また四〇分かけて山の中の宿舎まで送ってもらった。飲んではなかった会員がいたのだから、夜は三つしかない布団に六人で寝ることになる。

五月三日

宿舎の部屋に食事が運ばれてきた。朝食は用意されたものを運んできたのか、野菜類にみそ汁とご飯があたたかい。朝食をすませて、冷たいペットボトルの水と、レモンふうのミカン、それに弁当を受け取って出発。雲門嶺という峠まで車で運んでもらい、そこからスタートする。初めは林道のゆるやかな登り、すぐにつつじが目につく。仏堂ゴルで林道を離れ登山道を登ることになり、前方へアンテナの塔を見る。そこまではすぐに登りつき、なおもゆつくりとしたペースで登る。やがて本日の最高峰加智山が左手前方へ見えてくる。耳岩と称する岩が現れ、この岩の基部を右手へ巻くようにして頂へ出る。祖母、傾の縦走路のような感じがする。

上雲山(1118.4m)の山頂を、縦走路は左へ巻いて通過するが、分岐を右へ戻って山頂を踏む。立派な山頂標柱が二つ立っている。こうした標柱はこれから先の全部の山頂にあった。はるか下方の谷間には、昨夜我々が泊まったロッジが見えていた。

縦走路にもどり、いったん下ると林道と交差し、さらに稜線道を歩くと大きな岩がみえてきた。その岩の下にある茶店らしき小屋のところから迂回してきた車道は終わっている。米岩と名づけられたこの岩はロッククライミングの練習にもできる巨大な岩壁だ。右に高巻きして岩の上を伝う道と下を巻く道とがあり、二組に分か

れて進んだ。下の道はすぐ先で岩の下に水が湧いていて、冷たい水で喉を潤おすことができた。ここから小さなアップダウンと、だらだら登りの稜線が続く。最後には急な登りを、岩場には所々にロープが張ってあるような所もあるが、登りきったところがこの嶺南アルプス最高峰の加智山(1240m)山頂である。

風が強く、やや霏にかすむが三六〇度見晴らしがよく、今登ってきた縦走路やこれから行く尾根、そして明日の山々と素晴らしい眺望を楽しむことができた。山頂標識の脇には旧日本陸軍が設置したと思われ、日本の三角点標石とほぼ同じものが残されていた。記念写真を撮ったあと、ここで昼食かと思いきや、まだ少し先だすぐ直下に救急箱を入れた箱をみかける。登ってくる登山者や行き交うなかに、日本語の上手な六〇歳過ぎの男性と出会う。言葉を交わすと子供の頃覚えたという。しばし会話が弾む。

急な下りを過ぎ、緩いアップダウンの稜線道になったところの、中峰の少し手前で昼食をとる。朝さらには蔚山支部員持参のキムチや豚足、野菜とスープなどの差し入れを頂く。

すぐに中峰に登りここから長い下りとなる。団長の甲斐さんは途中からエスケープルートを下るとにしてはいたが、疲れも出てきた

ので、蔚山支部のリーダーが下るルートを選択し、少し先の下り終えた鞍部から右への近道に、迎えの車を廻すようにしたいと電話にて連絡を取る。遅くなる甲斐さんへ普さんに託して残り先を急ぐ。山へ向けては、長いアップダウンの縦走路となる。

途中からエスケープする甲斐さんは、ここから隊を離れてゆつくりと歩く。緩い長いアップダウンが続く。右手の下に林道があらわ

れたので、すぐ先に右へ下るエスケープルートがあると思われたが、力でも雨に変わりそうな気配で、明日の天気が気になる。迎えの車を待つ宿舎へ戻る途中、石南寺というお寺に寄る。尼寺というの寺へは、入口から10数分歩いて本堂へ。ここから見あげる岩が、高く連なっているのが見える。

宿泊所へ戻る途中のレストランにて夕食をとり、コンビニでの買い物組と分かれ私は一足早く帰りつきシャワーを浴び荷物の整理。皆が帰ってきて一部屋にて少し飲んで就寝。

五月四日

前日と同じような朝食をとり、今日の出发点へ。そこは昨日の下山地点ベネツゴゲ峠の広場だ。やや風が強いが、昨日の夕方心配した天気は、今のところ雨の心配はなさそうだ。八時二〇分発で、コースタイム四〇分の登りを五五分かけてベネ峰(九六六m)へ登りつく。ここから前方に見える肝月山へ向けては、長いアップダウンの縦走路となる。

途中からエスケープする甲斐さんは、ここから隊を離れてゆつくりと歩く。緩い長いアップダウンが続く。右手の下に林道があらわ

れたので、すぐ先に右へ下るエスケープルートがあると思われたが、力でも雨に変わりそうな気配で、明日の天気が気になる。迎えの車を待つ宿舎へ戻る途中、石南寺というお寺に寄る。尼寺というの寺へは、入口から10数分歩いて本堂へ。ここから見あげる岩が、高く連なっているのが見える。

宿泊所へ戻る途中のレストランにて夕食をとり、コンビニでの買い物組と分かれ私は一足早く帰りつきシャワーを浴び荷物の整理。皆が帰ってきて一部屋にて少し飲んで就寝。

前日と同じような朝食をとり、今日の出发点へ。そこは昨日の下山地点ベネツゴゲ峠の広場だ。やや風が強いが、昨日の夕方心配した天気は、今のところ雨の心配はなさそうだ。八時二〇分発で、コースタイム四〇分の登りを五五分かけてベネ峰(九六六m)へ登りつく。ここから前方に見える肝月山へ向けては、長いアップダウンの縦走路となる。

途中からエスケープする甲斐さんは、ここから隊を離れてゆつくりと歩く。緩い長いアップダウンが続く。右手の下に林道があらわ

れたので、すぐ先に右へ下るエスケープルートがあると思われたが、力でも雨に変わりそうな気配で、明日の天気が気になる。迎えの車を待つ宿舎へ戻る途中、石南寺というお寺に寄る。尼寺というの寺へは、入口から10数分歩いて本堂へ。ここから見あげる岩が、高く連なっているのが見える。

宿泊所へ戻る途中のレストランにて夕食をとり、コンビニでの買い物組と分かれ私は一足早く帰りつきシャワーを浴び荷物の整理。皆が帰ってきて一部屋にて少し飲んで就寝。

五月四日

前日と同じような朝食をとり、今日の出发点へ。そこは昨日の下山地点ベネツゴゲ峠の広場だ。やや風が強いが、昨日の夕方心配した天気は、今のところ雨の心配はなさそうだ。八時二〇分発で、コースタイム四〇分の登りを五五分かけてベネ峰(九六六m)へ登りつく。ここから前方に見える肝月山へ向けては、長いアップダウンの縦走路となる。

途中からエスケープする甲斐さんは、ここから隊を離れてゆつくりと歩く。緩い長いアップダウンが続く。右手の下に林道があらわ

嶺南アルプス概念図



スミレ等の小さな花をめでつつ登る。左へ崖下への道はロッククラ イミングの岩場に通じる道で、横 に見える岩稜のナイフリッチはア リランリッチ、スリランリッチと 教えてくれる。そして最後の急登 を登り切れば最後のピーク、一五 時少し過ぎ、霊鷲山(一〇九二 m)である。

ここからさらに南西方向に、嶺 南アルプスの稜線がもやの彼方に 出ていく。スリッパを注意してなおも下る。 8合目あたりか、眺望の良い所に 小屋もあり、呼んでみるが誰もい ない。ここからジグザグにつけて 湧き水がたまるようになってい る。ステンレスの小さなタンクに なるようになる。やや傾斜のゆる や 湧き水がたまるようになってい る。ステンレスの小さなタンクに なるようになる。やや傾斜のゆる や

ろまで車を回収に行き、また迎え に来ることになっていたので。舗 装道路に出て約一時間。通度寺と いうお寺の近くまで来て、全員グ ロッキー。しばし道ばたで休憩し て、ようやくの思いで通度寺にた どり着く。

元気のある者は寺を見物したり しているうちに、回収に行った車 が来て全員帰途に就く。途中、夕 食で立ち寄ったレストランは昨日 とは違うところで、うまいビビン バを食って帰りつく。夜、李さん が清算に部屋に来る。車代と交流 会の分は取らないと言ったが渡す。 やっと田圃が 見えて、アスフ ルトの車道に 出る。一七時で ある。車で迎え と聴いていた。三日泊まったロッ ジを引払い、迎えの車に乗り込 む。途中、二日目に夕食をとった ところ朝飯をして、慶州市に向 来た車には、蔚 山支部のメンバ 「あれが南山」と指さす。その山 が乗ってしま の麓の駐車場に車は着いた。そし て、我々はさら て、今日はこの山に登るのだと説 明がある。

みるも蔚山支部の会員も大勢い と歩かされた。 一人残った李さ て登る準備をしている。この南山 と四〇分「あ という霊山で合同登山会を予定し ていたようだ。案内看板がハン グ 歩くという。ソ ル、英語、日本語と3ヶ国語であ の四〇分とい うのが長かった 重なる山らしい。なるほど歩き出 すのとすぐに三つのきれいに並んだ 朝出発したとこ 大きな一枚岩を登ってゆくと次々

と石仏が鎮座している。(三陵溪 谷石造如来像) 一大ハイキングの 山である。多くの韓国の人も登っ ている。旗を持ったガイドがマイ クを通して説明しているのに出く わす。スーツ姿もツアーの一行の ようだ。

なおも脇道を見ながら登 り詰めたところに線刻六尊仏像が ある。七合目くらいに休憩ポイン トがある。上禅庵というお寺の建 物、中では熱心にお経をあげて木 魚の音も聞こえる。登るにつれ松 林の谷の向こうには、奇岩、奇峰 などの木が絶妙な景色を見せ、さ ながら山水の世界だ。緩い稜線 道を登りつくと、広い平らな金鳥 山(四六八m)山頂だ。ここで日 韓全員での記念撮影の後昼食。下 山は登りの道とは違い、やや北へ 大回りして下り、着いた有料のテ ーマパークみたいになっており、 家族連れも多い。途中三体石仏を 見て、朝出発した駐車場に戻る。

ここで蔚山支部会員とはお別れ だ。記念に相互の会旗にサイン をしてそれを交換しあう。そして、 予約していたチャーターのマイク ロバスに乗り込んで、蔚山支部員 の見送りを受ける。

ここからガイドがついて日本語 の説明もより楽しくなる。慶州も 時間がないので仏国寺のみとして 釜山へ。

仏国寺は三五三年創建の韓国最 大の寺院で、世界文化遺産にも登 録されている。仏教芸術の粹と讚

えられた美しい寺院を支える基壇、石段の整然とした造りと〇〇の石塔、それに見事な木造建築の美しさ。石と木の調和が荘厳な雰囲気をかもしだしている国指定の国宝と宝物は七棟に及んでいる。四天王門を入ると四天王像が迎えてくれる。最初の石段が白雲橋と青雲橋だ。三段ある橋を登り紫雲門をくぐるとそこは仏の国ということだ。大雄殿の前に国指定の多宝塔と釈迦塔がある。大雄殿の中央に釈迦牟尼仏、その左に菩薩像がある。これらはいずれも韓国の仏教芸術の頂点にあり、韓国の美の象徴でもある。

コースタイム

(阿南メモ)

5月2日(水)

6:00 8:22 8:39 8:45 10:15
 大分駅 → (JR…2:22) → 博多駅 → (タクシー0:06) → 博多港国際ターミナル → (ビートル3:15) →
 13:30 14:14 15:35 17:53
 → 釜山港国際ターミナル → (蔚山支部員の送迎車1:21) → 雲門山自然休養林 → (蔚山支部員の送迎車0:52)
 18:45 21:35 22:36
 → 蔚山市(レストラン) → (蔚山支部員の送迎車0:59) → 雲門山自然休養林(泊)

5月3日(木)

7:43 7:53 8:02 9:25 9:32 9:45 9:50 10:27 10:36
 雲門山自然休養林 → (蔚山支部員の送迎車0:10) → 雲門嶺 → (1:23) → 耳岩 → (0:13) → 上雲山 → (0:37) → 米岩 →
 11:35 11:48 12:09 13:33 14:03 15:43 16:12
 (0:59) → 伽智山 → (0:21) → 密陽ゴゲ → (1:24) → 石南ゴゲ → (0:30) → トンネル上部 → (1:40) → 陵洞山 → (0:24) →
 16:36 16:42 16:52 17:56 20:05
 ベネッゴゲ → (蔚山支部員の送迎車0:10) → 尼寺 → (夕食・蔚山支部員の送迎車2:09) → 雲門山自然休養林(泊)

5月4日(金)

7:50 8:15 8:20 9:17 9:25 11:25 11:29 12:00
 雲門山自然休養林 → (蔚山支部員の送迎車0:25) → ベネッゴゲ → (0:57) → ベネ峰 → (2:00) → 肝月山 → (0:31) → 肝月ゼ
 12:25 13:25 13:36 13:50 14:08 14:12 14:54 15:13 18:07 18:48
 → (1:00) → 神仏山 → (0:14) → 神仏ゼ待避所 → (1:18) → 錦渦ゼ → (0:33) → 壺笠山 → (2:54) → 通度寺 → (夕食・蔚山支
 20:25
 部員の送迎車1:37) → 雲門山自然休養林(泊)

5月5日(土)

7:30 8:57 9:18 11:54 12:37 14:36
 雲門山自然休養林 → (蔚山支部員の送迎車1:27) → 慶州南山駐車場 → (2:32) → 南山山頂 → (1:54) → 慶州南山駐車場
 15:43 16:41 18:53
 → (貸し切りバス0:38) → 仏国寺 → (貸し切りバス2:12) → 釜山ホテル(泊)

5月6日(日)

8:40 13:15 14:45 18:19 18:33
 釜山ホテル → 市内観光 → 釜山港国際線ターミナル → (ビートル3:34) → 博多港国際ターミナル → (タクシー0:10) →
 18:43 19:23 21:50
 → 博多駅 → (JR2:27) → 大分駅 → 解散

参加者名簿

氏名	会員・会友	生年月日	担当
甲斐 一郎	10793	1927/ 6/18	隊長
菅 勲	11568	1941/ 2/11	副隊長
渡部 昭三	会友	1938/ 4/11	会計
加藤 英彦	8765	1942/ 1/ 1	会計
飯田 勝之	10912	1943/ 7/22	進行
石川 洋祐	会友	1942/ 2/23	進行
中野 稔	13997	1953/12/25	記録
阿南 寿範	9165	1958/ 6/17	記録
西 孝子	8325	1932/ 2/ 3	事務局
稲葉 ヤヨイ	一般	1937/ 4/ 7	
石神 美智子	一般	1945/ 4/ 3	
飯田 ひとみ	一般	1948/11/12	

ついでに感想

韓国余話

加藤英彦

※費用
当初の予算見込みでは一人あたり一〇万円で試算していた。先ず実際徴収したのは一人あたり八万円、八〇,〇〇〇円×二人＝九六〇,〇〇〇円のうち、円払い

で支払った（J.R.、ビートル船賃、保険料、福岡港使用料）のが四六〇,〇〇〇円、残り五〇〇,〇〇〇円をウォンに両替して現地の経費支払いに充てた。それで一人当たり徴収した八万円が不足したが、最終日（六日）の昼食代（一人当たり二五,〇〇〇ウォン）と帰りのタクシー（福岡港―博多駅）代だけであったので、当初予算見込みより約二万円安くあがったこととなる。

※善意
善意での蔚山支部の方々の出費を補うために、皆で協議の上、車代として一台日本円で五,〇〇〇円とみて、五台分×四日間で、六〇

光のための費用七一〇,〇〇〇w
ホテル（釜山ホテル）五一〇,〇〇〇w
夕食（焼肉・牛田）四〇〇,〇〇〇w
朝食（ホテルバイキング）一九二,〇〇〇w
帰路の釜山港使用料一四〇,〇〇〇w
等の出費であった。

◆ 東九州支部より、蔚山支部へのおみやげとして持参した、小鹿田焼湯飲み三一個と焼酎三本、計三一、三九二円は支部の一般会計より支出した。

※他の精算の概要
単位・w（ウォン）
ロッジの使用料 二棟×三日分で三〇〇,〇〇〇w
朝食（三、四、五日）六〇,〇〇〇w×三日で一八〇,〇〇〇w
昼食（三、四、五日）四二,〇〇〇w×三日で一二六,〇〇〇w
夕食 三日 一六四,〇〇〇w
四日 一七〇,〇〇〇w
その他出費 観光バスチャーター代とガイド代（日本語）およびチップ（五、六日）、拝観料、駐車料、高速道路代等観

※食事
一口に言って微妙に味が合わない感じだ。キムチに代表される辛い味が多い。米もやや味が落ちる。ヤサイやおかずの出し方が、何人分かを一皿にして出し、これを取り合うかたちが多く戸惑った。これも現地の風習だろう。

釜山の夕食の焼肉店「牛田」も日本の方が味がよいと思った。（帰国後の反省会で食べた焼き肉「韓国苑」と比較して）六日の昼食も、時間が早く、朝食で喰ったバイキングの後のお腹が空いてなく、かなり無理をして詰め込んだが、色々出たので大半は残した。その席で食べた青いシトウの辛さが忘れられない。残った刺身などを持って帰るか

らと言ったら、簡単に入れるものを提供してくれた。日本だったら絶対に出来ないケースだ。アルコールは、ビールは日本とほとんど同じ味で、焼酎も同じ程度で毎夜の酒には不自由はなかった。

※言葉

ハングル語はなかなか分かりづらい。ハングル文字も何やら記号かパズルのようで、さっぱり分からない。言葉でやると覚えたのが「アンニヨハシムニカ(今日(は))」と「カムサハムニダ(有り難う)」ぐらいだ。「busan」「pusan」と「busan」の違い

釜山の英字表現が「busan」と表示されているので、これは間違いではないかと思ひ、帰ってしらべてみたら間違っていないのが分かった。二〇〇〇年から「busan」となったのだ。他にも金浦空港の「kinpo」は「ginpo」など、地名の英字表記に変更があった。ハングルの「k」「t」「p」「ch」に相当する音には、①共通に発音する平音と、②こもったような音の濃音(やっぱりの「ば」のように「っ」のあとに続く音に近い)③激しく息を出す激音の三つがある。これまで特殊記号を使ってこれらを区別していたが、IT時代に不便であるなどの理由から、「k」「t」「p」「ch」に相当する平音は「g」「d」「b」「j」と濁音で表示することになった。改訂から間もないので両方の表記が混在

しているとのことである。

慶州のことを「けいしゅう」と言っただけでも反応はない。正しくは「ジョンギ」英文字で「gyeongju」と言わなければならぬ。同じように済州は「さいしゅう」ではなく「チェジュ」「teju」なのだ。

嶺南アルプスの植物を見て

飯田勝之

さしずめアケボノツツジというところだが、ミツバツツジに似たその花の色合いはアケボノではない。関東の丹沢や奥秩父の山で見たことのあるヤシオツツジに似ているが、あれは白だった。アカヤシオというのがあると言いが、私は残念なことにまだ見たことがないのだが、どうやらこれが関東地方に多いアカヤシオのようで、緯度の上からも似た植物が多いのかもしれない。



(迦智山の頂上付近のアカヤシオの群落)

花々が咲いていた。そんな中に、時々目についた青色のシヨウジョウバカマ。この花はその名の通り、赤いのが普通であるが、色合いにはかなり幅があり、青みがかった紫から、白にうつすら紅色のついたものまで・・・。これまでも色々と見たが、ここで見たほど鮮やかに青い色は初めてだ。しかも、行く先々で見られる全てが青で、九州で見られる赤い色は一度も見かけなかった。最後のピークである、麗鷲山の頂上付近には青色が群落をなしていた。土壌のせいかもしれない。

③ 都市に近い一二〇〇m足らずの山なら、日本ならそのほとんど山腹はスギかヒノキの植林に被覆されているのが通常だ。しかし、釜山から蔚山、慶州とまわっても植林地と思われるような林は見あたらなかった。龍門嶺峠付近の斜面に明らかに植林されたと思われるナラの林を見た。九州なら間違いないシイタケのホダ木のための植林だが、そこはどうか崩壊防止のためのように思われた。木造建築の少ない国柄、林業のあり方も違うのだから、などと考えた。

④ 九州の稜線なら、人工林でなければシイ、カシ、タブなどの照葉樹林か、一〇〇〇mを越すとこゝろでは新百姓山の稜線のように、ブナやカエデ、シデ、シヤラなどにモミ、トガなどが混在するであろうが、そうした高木の林はなく、背丈の低いナラを中心に、シラキやダンコウバイ、リョウブ、タン

ナサワフタギなどの中低木の中に、ミツバツツジやヤシオツツジが混じっているといった状態である。そんな中、麗鷲山からの下りは林相が違っていた。標高8〜900m以下のあたりからは、見事な赤松の純林である。それはしかも、麓に下っても延々と続いていた。マツクイムシに犯されて、赤松林がほとんど絶えてしまった感のある日本では見られない光景であった。

友好登山に参加して

渡部昭三

昨年、蔚山支部の方々が九重に來られた時の歓迎会に参加した時、来年は東九州支部が韓国を訪れると聞き、是非参加したいと思いました。幸い日程が五月のゴールデンウィークだったので、参加することが出来ました。私にとっては初めての海外の山行であったが、気候も自然も九州とほとんど変わらず、新緑の時期でツツジの花もあちこちに咲き誇り、本当に楽しい有意義な登山でした。何よりも私が感激したのは、蔚山支部の方々の温かい歓迎ぶりでした。釜山港での出迎えから、慶州での送迎まで、車の提供と運転

食事の準備、山行の同行、おまけにお寺などの観光案内にいたるまで、心温まるお世話を頂いたことです。韓国には日本のゴールデンウィークのように、この時期に連休はなく、お世話下さった人たちはそれぞれ交代で休みをとって参加したとの由、有り難いことでした。

日本からの参加者は平均年齢六五歳でしたが、蔚山の参加者は五〇歳以下が多く、歓迎会でも若い人が多く、山で出会った登山者も若者が多く、中高年ばかりの日本の山とは違って羨ましい限りで、韓国の登山はこれからも大いに発展するものと感じました。

気候、風土、文化、工業化等日本と似たところが多く、仏教遺跡を見学して、その歴史は日本より古く、それらの文化は韓国から来たものだと思えました。工業レベルも日本に追いついてきているのを、山の上からサムソンの電子工場群や、高層住宅群を見て実感しました。

韓国の交通は、戦後ずっと車優先社会できており、日本より交通信号が少なく、スピード制限も緩く、高速道路も発達していました。高速道路は戦時には飛行場になるため、毎年訓練していると聞き、まだ戦時体制下にあること、北朝鮮との関係が早く改善され、平和になって欲しいことを痛感しました。

韓国では日本よりも英語に通じている人が多いと思っていました

が、お会いしたほとんどの人は話されず、日本語も通じる人が限られていたため、いろいろなことをお聴きしたかったのですが、言葉が通じず、痒いところに手が届かないもどかしさがありました。でも心が通じておれば、最低限の意思疎通はできるものです。

今回の山行の成果を一口で言えば、「蔚山の山中間の歓迎とお世話に多謝、日韓の友好万歳」来年日本に来られたら出来るだけお世話したいものです。これからも友好登山を通じて、日韓の友好が深まっていくといいと思います。

菅 勲

後線を風吹き渡る迦智山の
岩影に小さき黄堇の咲く

南山寺の他の何骨の花明かい
岩に彫られし仏に灯す

古の大梵鐘の響きわたる
釜山の山に夕日傾く

耳岩の苔の青さや夏近し
踏青や風の中なる肝月山

尼寺や山門高し姫あやめ

万緑の影の深さや仏因寺

菅 攝子

迦智山より夫が
持ち帰りし石清水
因境を越え身に甘く沁む

西 孝子

マンション林立、車多く、民家（農家）見られず、聞けばマンションより車で田、畑へ通うらしい。自然林、ピンクの花（ミツバツツジ？）この花びらを食べながら歩く。迦智山の山頂の岩の上に三角点あり。陵洞山より勝手に尾根を林道に下った、我が儘を反省している。五月晴れ、嶺南アルプスといわれる山容の美しさ。世界文化遺産の慶州南山の石仏群に驚く。徐鎮吉写真集を頂く。また行きたい、蔚山へ。

見てた？私のサブライズ

稲葉ヤヨイ

初日の第一目的地は「迦智

山へ、身体が順応するまで、左右に待たせたツツジや甘露な石清水に助けられる。前方が開け、木立の切れた左側にその頂は突然表われた。

いま、高度差約三メートル？先に登頂した人の休む姿が見えた瞬間にスタミナが切れた。サブライズ！！

表面を装ってやっと山頂へ・・・。そして、石碑の横で動けなくなつた。記念撮影したい人が私を囲む。弱った気持ちを奮いたたせるのに五分とかけられない。休憩はおわつた。短くてよかつた。長かつたら、立ち上がれなかつた。元気を取り戻す気力は、そんな経過の中で早急に蘇つた。

歩きながら、「天気も良くて、本当に来て良かった、最高」と思わず叫んだ。

最高にカムサハムニダ

飯田ひとみ

「韓国の蔚山に登山に行かないか」と、突然夫から誘われた。年に一、二度しか登山しない私は、体力的に少し心配があったが、「つれてって」とお願いした。

韓国についての知識と云えば、ヨン様とキムチ、チヂミ、それに「あかすり」くらいしか知らない私。



運門嶺の登山口

5月13日の大分合同新聞（朝刊）



上雲山より雲門山自然休養林のある谷間を俯瞰する。中央がロッジのあるあたり。



耳岩



米岩



ロッジの前で



耳岩の上で



李先生の奥様（右から二番目）と（後ろのマサイン）は李先生（



迦智山山頂の万歳



神仏山にて



ペネ峰にて



慶州南山山頂にて



麗賦(笠)山にて

終わりに

西 孝子

三名の方(孫慶錫、李建旭、朴喜萬)のおかげで三年間の交流がスムーズにできたのである。孫慶錫先生は四十三年前に大分に来た折りに、金池小学校を訪れ、私の授業(小学一年)を一時間参観し、その後全校を校長の案内でまわった。



寄せ書きの支部旗を交換



た。おみやげは、一年から六年までの小学校全教科書である。ある日電話で、「日本山岳会に入会したいので推薦してほしい」と言われた。「貴方が直接本部に申し出れば、だいじょうぶです」と答えた。この相手が会員名簿の七七五番、入会一九八五年七月となっている、名誉会員(推薦一九九四、一一)で韓国山岳会の重鎮、孫慶錫先生である。李建旭さんは蔚山市韓日親善協会事務局長で、孫慶錫先生の教え子である。朴喜萬先生は大分大学の非常勤講師をもう長く務めており、蔚山支部と東九州支部との大事な橋渡しをして頂いている。平成一七年、大分市観光課より「韓国蔚山市より親善視察団が来るが、その中に十一名韓国山岳会員がいて、山岳会との交流をしたいという希望があり、大分市内の人を集めて欲しい」と電話があった。あわてて連絡して十三名が集まり、コンパルホールで交流会を開いた。この時の話し合いで「今後相互に交流登山をしよう」ということになり、昨年二十八名が大分を訪れ、九重山系を案内した。孫慶錫先生が、東九州の西孝子をたずねればといわれて、前記二人の協力で、こまめにお世話頂いた。四年前の年次晩餐会に参加され、四十年ぶりの再会を喜び、その後蔚山との件では何度も手紙をいただいた。

日本山岳会東九州支部報 号 外

2007年(平成19年)7月25日(水)

発行者 梅木 秀徳
 編集者 飯田 勝之
 発行所 〒870-0021
 大分市府内町1-3-16
 サニースポーツ内 西 孝子方
 TEL・FAX 097-532-0926
 題字 (故)佐藤正八

五月二日、釜山港着。時を待たず孫先生との声を聴かせる李会員に、その時まで先生のことは念頭になく、申し訳ない。六日の帰る間際、ビートルに乗船直前に孫先生の声を聴かせる教え子である。韓国の方は、人を大切にする民族である。来年の蔚山からの訪問に応えねばならないと思う。※ 大分登高会が、インスピンのロッククライミングに行った時、ソウルの先生(孫氏)宅におじゃましたのがきっかけだ。

